

令和4年度

# 福祉作文

WELFARE COMPOSITION

社会福祉法人  
赤穂市社会福祉協議会





# 「ふつうのくらしのしあわせ」を感じる福祉のまちづくり



社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

理事長 児嶋佳文

新型コロナウイルス感染症の影響が長期化し、人と人が互いに接触する機会が制限された結果、地域住民等による福祉活動やボランティア活動は休止や縮小等活動の自粛を余儀なくされ、地域がつながり、「ふつうのくらしのしあわせ」を感じながら生活する日常が失われたことにより、世代に関係なく社会的孤立に拍車をかけることになりました。さらに物価高騰や経済活動の停滞等により、生活に困窮する人が増大するなど、様々な生活・福祉課題が複雑化・深刻化しています。

誰もが安心して暮らすことができる福祉のまちづくりを使命とする社会福祉協議会には、こうした今日的な地域福祉の課題を受け止め、地域のつながり、支えあいを強化しながら、その解決に向けた取り組みが強く求められており、今後とも市民の皆さまをはじめ、関係機関等と連携・協働し、地域づくりの推進に努めてまいります。

中でも、次世代を担う子どもたちの福祉教育の推進は特に重要であり、社会福祉協議会では、従来から赤穂市や学校園はもとよりボランティアの皆さんと連携を図りながら、心のふれあいと思いやりが体感できる福祉教育の推進を図っており、今後さらにそれらの支援を充実させてまいりますので、これまで以上のご協力を賜りますようお願いいたします。

本年度も福祉の問題は「地域で暮らす方の身近な課題である」ということを認識していただくため、「福祉作文」を募集しましたところ多くの作品の応募があり、いずれも心に響く作品でしたが、その中から優秀作品を選び、「赤い羽根共同募金」の配分金をもとに文集を作成いたしました。

この文集が大勢の皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、助けあい、大切にしようとする気持ちたちが社会に広がり、本市の地域福祉が向上することに少しでも役立てれば光栄です。文集の発行にあたりまして、作品を応募していただきました皆さま、ご指導、ご協力をいただきました学校関係者の皆さまに深くお礼申し上げます。

令和四年十二月

\*福祉作文\*

小学生の部

大賞	たかちゃんを通して思ったこと。	赤穂小学校五年	平沼美柚	1
特選	みんな同じ	塩屋小学校五年	井上葉凡	3
入選	ぼくとおとうと	赤穂特別支援学校小学部四年	北村一愛	4
	マスク問題	赤穂小学校六年	新田佳矢	6
佳作	私にできる事	赤穂小学校三年	飯塚空	8
	平和を願い	城西小学校四年	飯尾真優美	9
	安心の生活をつくる	塩屋小学校六年	笹山千紘	11
	高齢者が住みやすい町へ	赤穂西小学校六年	前田斗優真	13
	父の車いす生活を通して考えたこと	尾崎小学校六年	長谷川旺祐	14
	病気と戦っている人のために	御崎小学校五年	小林柑奈	16

中学生の部

二〇二二年夏の甲子園

大切な命

私にとっての福祉

ぼくの弟

坂越小学校六年

高雄小学校六年

有年小学校五年

原小学校三年

清水 琉至

山下 華依

高本 紗彩

武内 永和

18

19

20

21

大賞

ある新聞記事を読んで

赤穂中学校一年

川畑 湧士

24

特選

SOSのサイン

赤穂西中学校三年

井出 乃愛

25

入選

見方が変われば心も変わる

坂越中学校一年

中嶋 望愛

27

高齢者問題について

赤穂東中学校二年

目木 茉奈佳

29

佳作

気付き、助け合う社会に

赤穂中学校三年

石原 陸翔

30

ぼくのできること

赤穂西中学校一年

山本 雅士

32

じまんのひいおばあちゃん

赤穂東中学校二年

内藤 真白

34

誰でも平等に楽しむために考えを深める

坂越中学校一年

平井 心羽

35

ひいおばあちゃんの笑顔

有年中学校三年

遠藤 蒼依

37

## 高校生以上の部

大賞	魔法のエール	赤穂高等学校一年	平尾幸花	……	39
特選	介護食配達ボランティアなどを通して	一 般	真鍋憲昭	……	40
入選	一人一人の福祉	赤穂高等学校一年	寺田想来	……	42
	福祉から学ぶ幸せとは	赤穂高等学校二年	長谷川楓	……	44
佳作	運転免許証の自主返納	赤穂高等学校二年	中元俊太	……	46

※「障害」や「障害者」などの「害」の字はひらがな表記にしています。  
ただし、法律名については漢字表記にしています。

## 小学生の部 大賞

たかちゃんを通して思ったこと。

赤穂小学校五年 平 沼 美 柚

私の大叔母、たかちゃんはダウン症である。たかちゃんとは正月、祖父母の家で会う。祖父母の家ではよくこたつやつくえでねころんだりすわりながら、ティッシュをちぎってまるめて、まるめたティッシュをならべて遊んでいる。たかちゃんは会話が得意でない。だが、話せる言葉はいくつかある。親や兄弟、自分のめい、おいの名前の一番下の文字と、「かわいい。」

だ。これは全部、たかちゃんのお父さん、お母さんが教えた言葉である。

祖母にたかちゃんの小さいころの話を聞いてみると、とうじは医学があまりはってんしておらず、たかちゃんは5さいまでしか生きられないと言われた

のでたかちゃんのお父さん、お母さんが、

「かわいいがってあげてね。」

と言ったらしい。その言葉どおり兄弟みんなたくさんかわいいがったそうさだ。

たかちゃんは明るい性格で、特別支えん学校にいったけど、その当時は小学校しかなく、たかちゃんは中学校には行かず、たかちゃんのお父さんの工場にずっといたと。

みんなは、「障がい」という言葉の意味を知っているだろうか。二つ意味があり、一つは、何かをするときに、じゃまになるものごと。もう一つは、体の機能が十分にはたらかないこと。これを聞いて、障がいを持っている人は、

「かわいいそう。つらいのでは？」

と思った。けれど、祖母の話を聞いていて、考えが変わった。

だって、祖母が、

「家族みんなで助け合っていて、ふつうに幸せで、楽しかった。」

と言っていたから。

それに、たかちゃんが話せる言葉、親や兄弟、自分のめい、おいの名前の一番下の文字と、「かわいい。」

は、家族に愛されてないと言えない。それは、「障がい」を持つていなくても。ふつうの人よりはできないことが多いと思うけれど、家族の一員として、みんなを笑顔にできる。だから、家族にとつて、たかちゃんは大切な家族の一人だからだ。そう思うと、「障がい」はけっして悪い物ではない。そう思った理由はもう一つある。

ダウン症の子供は天使と言われている。なぜなら、ひじょうに穏やかで、微笑んでいるように見えるからだというが、私は、みんなを笑顔にしているからだと思う。けれど、みんながみんな、思っているわけではない。確かに他の人とくらべるとできないことが多いけれど、いっしょにいと、たのしいこと、うれしいことをみんなといっしょにできて、笑顔になる。お世話とかがたいへんかもしれないけれど、そのぶん、いろんなことを知れる。だれでも、家族といっしょにいて幸せ。ということであらためて教

えてくれる。

「障がい」があっても、なくても幸せになれる。家族といっしょなら。たかちゃんを通して、そう思った。



## 小学生の部 特選

### みんな同じ

塩屋小学校五年 井上葉凡

私は、四年生の時に、福祉について学びました。

福祉について学ぶまで私は福祉を知りませんでした。でも、目や耳や、体の不自由な人が、世の中にはたくさんいることは知っていたので、深く考えたことがありました。

「目が見えない人はどうやって生活をするのかなあ…。」

「耳が聞こえない人は、人とどうやって会話をするの？」

私は、そう深く考えることがふえていました。

「可哀想。」

四年生になり、福祉について、意味などを調べました。

私は今まで可哀想などの言葉とは、目や耳や体が不自由な人にとって、安心する言葉、ありがたい言葉だと思っていました。でも、それは真逆でした。

「可哀想。」

この言葉とは、目や耳、体の不自由な人にとっては、いい気持ちにはならないのです。

「ふつうじゃないの？」

目や耳、体の不自由な人にとって、可哀想などの言葉とは、深く自分がみんなと違い、ふつうではないと考えてしまうのです。

それに、この言葉は、差別にもつながるのです。私は思いました。

「どうして差別をする人がいるの？」

人間は同じ。生きるということも同じ。

五年生になって、高齢者のことについて学びました。

高齢者体験をした時に私は思いました。

「高齢者になると、目が見えにくくなったり、耳が聞こえにくくなり、体が動きにくくなることも多いのに、差別をする人がいたら許せない！」

「ふつうの人。」

だなんていないのです。

みんな同じように生きています。

差別なんて有りません。

しょうがいをもっている人、目や耳、体の不自由な人、しょうがいをもっていない人も、目や耳、体が不自由ではない人も、みんな同じなのです。

世の中、たくさんの方がいます。

人それぞれ、個性だって違います。生き方だって違います。

でも、みんな同じなのです。

このように、差別とはしてはいけないことなのです。

「ふつう。」

なんてないのです。みんな同じなのです。

私は、このことを、世界中の人に知ってほしいと思います。

## 小学生の部 入選

### ぼくとおとうと

赤穂特別支援学校小学部四年 北村 一愛

ぼくは、赤こうとくべつしえん学校にかよっています。どうしてかというと、おなかのびょう気と目のびょう気と耳のびょう気だからです。あと、けいさんとかかん字とかとけいのべんきょうがいが手です。

ぼくのおとうとは、たかお小学校にかよっています。三年生です。

ぼくとおとうとは、まい日けんかばかりしています。どうしてかというと、いつもくつついています。おかあさんはずっと、はなれなさいとかみなりをおとします。でも、ぼくとおとうとはくつついています。どうしてかというと、ぼくはおとうとのおことが大好きだからです。おとうとも、ぼくのこと

とが大すきだそうです。

おとうとは、ぼくのよめないかん字が出てきたら、よんでくれます。けいさんのまるつけもしてくれま  
す。こうえんにいくときも、いっしょにいつてくれ  
ます。おともだちが、ぼくにいじわるしてきたとき  
は、おとうとがいいかえしてくれました。うれしかっ  
たし、つよいなーとおもいました。ぼくがかん字を  
まちがえたり、けいさんをまちがえたりしても、お  
とうとはやさしくおしえてくれます。ぼくのえにつ  
きをまいにちほめてくれます。ぼくがくつをかたづ  
けるのをわすれていたなら、おとうとがかたづけてく  
れます。だから、ぼくはうれしくて、おとうとのこ  
とが大すきです。

でも、おとうとはさく文がにが手です。だから、  
ことばがわからないときはぼくがおしえてあげま  
す。おとうとはゲームもへたくそです。ぜんぜんす  
みません。だから、ぼくのステージでやらせてあ  
げています。おとうとがおかあさんにおこられて、  
おやつなしてなつたときは、ぼくがこっそりおや  
つをあげています。だからおとうともぼくのこと

大すきだとおもいました。

ぼくは、できないことがいっぱいあります。一人  
でトイレにいけないし、一人でねることもできない  
し、一人でこうえんにいけないし、かん字の本をよ  
むのもできません。でも、おとうとといっしょだつ  
たらできます。二人でおつかいもできるし、たかお  
小学校のおともだちとあそぶこともできます。二人  
でおるすばんもできます。どうしてかというと、ぼ  
くがこまったとき、おとうとがたすけてくれるから  
です。ぼくもおとうとがこまったときはたすけます。  
二人でたすけあつたらさいきょうです。

まい日おもちゃのとりあいでけんかして、ゲーム  
のとりあいでけんかして、わる口のいいあいこでけ  
んかして、いつもけんかばかりだけど、おとうとが  
いなきやだめです。だから、あしたからけんかをす  
くなくします。おとうとのことをだいにじにします。  
これからも、ずーっと二人でたすけあつていきます。  
大すきなきょうだいでいたいのです。だからそらくん、  
これからもぼくのことをだいにすきでいてね。よろし  
くおねがいます。

## マスク問題

赤穂小学校六年 新田佳矢

コロナが世界中で流行してから、世界中でマスクをする、しない、という事で、論争がおこっています。

私は、自分がコロナにならないように、また自分以外の人にコロナを移さないように、マスクは絶対にした方が良くと考えているので、外に出る時は必ずマスクをします。

だから、マスクをしていない人を見ると、

『なんでマスクをしないんだろう。』

『マスクしてほしいな。』

と、思ってしまう。

だから、マスクをしてない人を見た時に、お母さんに、

「あの人、マスクしてなかったね。なんでしないんだろうね。」

と、聞きました。

するとお母さんは、

「事情があるんだよ。」

と、言いました。

『なんの事情やる。』

と思った私は、このマスク問題から大切な事を教えてもらいました。

お母さんが言うには、ただ付けるのを忘れただけの人もいると思うけど、アレルギの病気を持っていて、マスクを付ける事が出来ない人もいない。

障がいがあつて、マスクをする事が出来ない人もいるという事。例えば、自閉症の人は、マスクをする事が怖かったりするそうです。

また、その人は相手の人がマスクをしているのを見るのも怖かったりするそうです。マスクをしている部分の顔がなくなってしまうと錯覚して怖いそうです。

だから、怖がらせない為にマスクをする事が出来ない場合もあるんだよ。と、教えてもらいました。

また、虐待やいじめ、おぼれかけた人とかも、マスクが出来なかったりするそうです。

それは、口をふさがれて、息苦しくなった事を思

い出してしまいうからだそうです。

病気や障がい、つらい経験からマスクが出来ないという事情があるというのを知って、私はショックを受けました。

私はマスクをしない人は、ルールを守らない悪い人だと思ってしまうていたからです。

人には、それぞれ事情があつて、一般的にあたり前と思っている事はあくまでも、心と身体が健康な人の考え方なんだと知りました。

マスクをしてない人をにらんだり、すごいいきおいで注意する、「マスク警察」という人達がいるとニュースでしていましたが、知識がないから、自分が経験していないから、そういう行動をとるんだと思うから、ニュースも、もつとマスクが出来ない人の事も、いっぱい放送すべきだと思います。

学校でも、マスクをしましょう。と、マスクの大切さは教えてくれましたが、中にはマスクがどうしても出来ない人も居るんだよ。という事を教えていってくれたら、その子供達が家に帰って、お父さんやお母さんに教えていったらそのお父さん、お母

さんが仕事場等で一緒に働いている人におしえてあげれば、知識は広がっていくと思うから、ぜひ学校でもこの話をしてほしいと思います。

そして、世界が皆相手を思いやる、優しい世界になつていったらいいなあと思います。



## 小学生の部 佳作

### 私にできる事

赤穂小学校三年 飯塚 空

私がお母さんと車にのっている時、一人のおじいちゃんが歩いていました。

そのおじいちゃんは、白いぼうの様な物を持っていて、めがねをかけていました。

私は、お母さんに「なんで白いぼうを持っているのかな？」と聞いてみると、「目が不自由な人だと思ふよ。」と教えてくれました。

私は、そう聞いても「なんで白いぼうを持って歩くのか」とまったくわかりませんでした。

だからもつといろいろお母さんに聞いてみる事にしました。

聞いてみると、今まで私が知らなかったことや、生活している中で、めじるしになるような事がある

のかとびっくりしました。

まず私が気になっていた白いぼうは、まわりのじょうほうや、不自由な事を知らせるために、とても大事だと分かりました。

私が道路を歩いたりしてもどこにすすむか分かるけど、見えない人たちは、どうやって行きたい方向が分かるのかとてもふしぎです。

物にぶつかったり、きけんな道だったりしないのかとすごく思います。

そのために白いぼうはとても大切だと気づきました。

私は、家でタオルをまいて目をかくしてみました。タオルで目をかくしたしゆんかん、いつきにくらくなつてこわくなりました。

何も見えないし、家の中なのに、自分がどこにいるのかめっちゃくちゃ不安になりました。

家を一周するのにも、こわくてこわくて歩きはじめる事ができませんでした。

家の中でもこんなにこわいものだから、外に出てみたらと思うと、こわいし、ケガするし、不安な事し

かないと思います。

車の多い道、信号のない道路、ふみきり、坂道、階段、数えきれない位のきけんな場所がある事にも気づきました。

今まで、何も思わなかったけど、自分が少し体けんしてみる事で、気持ちもかわったりしました。

もし外で目の不自由な人を見かけたり、会ったりしたら「信号は青だよ。」とか「自てん車来てるよ。」とか教えてあげられる様になれたらいいなと思いました。

目の不自由な人だけじゃなくて、体の不自由な人はたくさんいると思います。

足の不自由な人や、耳の聞こえない人、事こやびょう気で車いすの人もいると思います。

車いすを一人でおしてる人を見かけたら、いっしょにおしてあげたり、耳の不自由な人には、紙に書いてつたえてあげることくらいは私にもできると思います。

今の私にできる事は少ないかもしれないけど、体の不自由な人それぞれの気持ちを考えて何をすれば

助けになるか、よろこんでもらえるとか私も考えたいです。

大きくなった時に、たよってもらえる人になりたいて思っています。

## 平和を願う

城西小学校四年 飯尾 真優美

わたしは、今年になってテレビのニュースでウクライナとロシアの戦争が始まったのを知って、とてもビックリしたのを今でもおぼえています。それは戦争は教科書で習うものだと思っていて今の世界には全く関係ない、と思っていたからです。

ロシアがウクライナの土地を燃やしたり、家をこわしたりするニュースを見ると、むねがいたくなりました。それ以上にむねがしめつけられ悲しくなつたのが、ウクライナの多くの人たちが殺されていることです。何も悪いことをしていないのに、赤ちゃ

んやわたしみたいな子どもたち、おじいちゃんおばあちゃんまでぶきなどを使って殺されていて、とても信じられませんでした。ある日とつぜん学校や会社に行けなくなり、ふつうの生活が生きなくなつて、ばくだんやロシアの兵隊からにげる生活は苦しくて悲しいだろうかと、ウクライナの人たちが心配になりました。

あと、ロシアの国民が戦争に反対と言ったり、ウクライナの人を助けたりしたらけいさつにつかまり、ろうやに入れられるのにおどろきました。戦争について自由に自分が思っていることを言えないし、ロシアに住んでいるかぎりウクライナの人を助けてあげようと手を差しのべることもできないなんて、自由な国じゃないと感じました。

それと戦争が始まって一番おどろいたのが、パンや大好きなお菓子、ラーメンなどスーパーで売っている物や飲食店の食べ物が一気に高くなったことです。お母さんも特にパンが高くなったと、ほぼ毎日言っています。わたしも今まで百円で買っていたチョコレートが百二十円もしていてビックリしまし

た。お母さんが言うには、ウクライナは小麦をいっぱい作つてそれを世界中に輸出していたけど、ロシアとの戦争が始まって小麦を輸出できなくなったから高くなったんだよって、教えてくれました。その話を聞いてからすぐ、ウクライナの港で小麦をつんだ船にばくだんが当たり燃えていたり、小麦畑が燃えていたりするニュースを見ました。なぜロシアの兵隊さんがこういうことをするのかわたしには分かりません。

この悲しい悲しい戦争が始まり六カ月が経ちました。最初はすぐに終わると思っていたのに日に日に戦うぶきも増え、亡くなっていく人たちが増えて、まだ終わる気配がみえません。この作文を日本で書いている今も、ウクライナのどこかではばくだんや銃におびえている人たちは大勢いると思います。わたしにできることは何もないかもしれないけど早く戦争を終わることを祈ります。

わたしが大人になつてもこの戦争のことは一生忘れることはないです。そして、この悲しい戦争のことを思い出し、平和の大切さや人への思いやりを大

切にして、ふつうの生活が送れる幸せを感じたいと思います。

早くウクライナの国民のみなさんに幸せがくるように願います。

## 安心の生活をつくる

塩屋小学校六年 笹山千紘

近代化が進む二〇二二年現在、生活が便利になる中、障がい者や身寄りのない高齢者にとっては、サービスが充実した一方、暮らしにくい環境下に置かれている。私の弟も発達障がいを患っている。特別支援学校に通い、放課後デイサービスやピアノの習い事などに通っているが、将来どんな人生を歩むのかという不安を感じる事がある。今八歳の弟が成人する頃には両親も還暦を迎え、いつ何が起こるか分からない状況下に置かれてしまう。

そこで私も障がいを持っている人達はどんなサー

ビスを受けられるのか知る必要があると考えた。

まず、障がいというものはどういう物なのかについて調べてみた。「障がい」とは、身体障がい・知的障がい・精神障がい（発達障がい）・その他の心身の機能の障がいがあり、生活に制限を受ける状態にある人をいうそうだ。

詳しく知れたところで、障がいを持った人に対してどのような取り組みが行われているのか調べたいと思う。

まず、介護などの身体的なサポートについて調べた。一つ目は、「居宅介護・重度訪問介護」等の取り組みだ。主に入浴、排泄、食事等の介護や家事の助言や援助を行っている。これは、受給者本人や身内が安心して暮らせるようにするための取り組みだ。家族が介護のために職を離れたり、短期間でスキルを身に付ける事は、多忙な現代社会において必要不可欠である。

二つ目は、治療が必要な障がいを持つ人達の手助けをするための「療養介護」だ。療養介護は、ALS（筋萎縮性側索硬化症）や重度の心身障がいなど

を患う人のための取り組みだ。主に療養上の管理、看護、日常生活上の世話など全面的な支援を行っているのが特徴だ。少子高齢化によって施設に入居できない、介護する人がいないなどの問題を解決することができる。

次に、障がいをもつ人が自立するための取り組みについて調べた。

一つ目は、障がいのある人の自立をサポートするための「自立訓練」だ。自立訓練には、機能訓練と生活訓練の二種類がある。どちらも受給者の自立を図るために作られたものだが、機能訓練は主にリハビリが中心なのに対して、生活訓練は自立した日常生活を送るための支援となっている。

二つ目は、障がいを持つ人の就職を手助けする、「就労移行支援」だ。これは、六十五歳未満の通常の事務所への採用が見込まれる人に、必要な知識や訓練・適正に応じた職場の開拓などを手助けしてくれる。また、就労移行支援にはA型とB型があり、通常の事務所に就職する事が難しい場合のサポートを受けられる。

他にも様々な支援があるが、主に障がいを持つ人が安心して暮らすための赤穂市の支援をまとめた。

私は、まだまだ障がいの有無は社会上で大きな格差を生んでいるのだと思っていたが、安定した快適な生活を送るための支援が整えられていて安心してた。しかし、独り身の障がいを持つ人が支援について知らない、受給の仕方が分からないという問題や、受給する人が増え、提供者が受け入れられないこと、できないなどの問題もいずれ起こるかもしれない。

その中で私達ができることは、平等に接して助け合う。それに尽きると思う。困っているときはお互いに助け合い、格差を生むような態度を取らない。ただそれだけで世の中は変わると思う。



## 高齢者が住みやすい町へ

赤穂西小学校六年 前 田 斗優真

ぼくには九十七才になるひいおじいちゃんがいま  
す。四年前に九十四才でひいおばあちゃんが天国へ  
旅立ちました。それまで九十三才のひいおじいちゃ  
んとぼくのおばあちゃんが介護をしていました。二  
人は九十を過ぎるまで本当に仲が良く、どこへ行く  
のも二人で一緒にぼくの家にもよく遊びに来てく  
れ、とても可愛いがってくれました。

九十を過ぎ、ひいおばあちゃんは足腰が弱くなり、  
車いす生活。さらに、認知症もひどくなり、ひいお  
じいちゃんを困らすようになってしまったそうです。

「老老介護」 高齢の夫が高齢の妻の介護。大変と  
いう言葉で言い表すことができなかつたそうです。  
さらにおばあちゃんも六十を過ぎていたので、二人  
協力してひいおばあちゃんの介護を行っていまし  
た。ひいおばあちゃんの認知症は日を重ねることに  
悪化し、「おふろに入れて」とおばあちゃんを困ら

す日が多くなってきたそうです。「デイサービスで  
入ってきたやろ」と言っても、「入っていない」と  
何回も言っていたそうです。

そんな話を聞いていると、ひいおじいちゃんとお  
ばあちゃんがたおれないかとぼくの母は心配してい  
ました。ひいおばあちゃん、ひいおじいちゃん、お  
ばあちゃんを少しでも元気づけたい、そう思い、ぼ  
くたちは毎週のように会いに行っていました。ぼく  
には妹がいます。当時一才。子どもが大好きなひい  
おばあちゃんは妹を見て、何度も何度も「可愛いな  
〜」と笑顔で話しかけてくれました。その笑顔を  
見て、ひいおじいちゃん、おばあちゃん、そしてぼ  
くたち家族は、幸せだったし、一番安心できた時間  
でした。そして九十四才、ひいおばあちゃんは天国  
へ旅立ちました。

ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんが亡くなっ  
てから元気がありませんでした。コロナ禍というこ  
ともあり、自由に外出することが減り、少し物忘れ  
が増えたように感じるとおばあちゃんが言っていま  
した。

そんな中ひいおじいちゃんもいやがっていた、デイサービスに通うようになりました。

「まだまだ元気でおらなあかん」と体を動かしたり、友達とお話したり、楽しい時間を過ごしているようです。

デイサービスに行くことにより、ひいおじいちゃんも元気を取り戻し、おばあちゃんは少しだけ、自分の時間を作ることができ、気持ちが楽になったそうです。

今の時代、老老介護が増えている中、デイサービスという場所は、時間に余裕ができたり、心に余裕を持ったり、色んな人を救ってくれます。ほくたちのひいおじいちゃん、おばあちゃんも救われた一人です。

ニユースでよく介護づかれで大事な人を殺してしまふ。そんなニユースを目にします。そんな事件が起こらないよう、デイサービスという場所を頼って、気持ちに余裕が持てて、楽しく介護ができる。そんな世の中になってほしいとほくは思います。

たくさんの人が救われますように。

## 父の車いす生活を通して考えたこと

尾崎小学校六年 長谷川 旺 祐

僕は、六年生の一学期に学校で車いす体験をしました。学校の周りの道路で車いすに乗ったのですが、みぞにタイヤがハマってしまい、なかなかぬけだせなかつたり、歩くスピードよりも、車いすはとてもおそくて困りました。段差も簡単には上がれなくて、前の方にこけそうになったりと不便なことがいっぱいありました。他にもジャリ道やせまい道を通るのも大変でした。そして何より車いすの生活で一番困るのはトイレだろうなと思いました。でも、正直なことを言うと僕は車いす体験を楽しみにしていました、実際乗って車いすは楽しいなと思いました。

この夏、父が足のケガをしてしまいました。ランニングをしていたら、突然右足に力が入らなくなつたのです。病院に行ったら前十字じん帯の断れつと言われて、手術をすすめられました。約二時間の手術の後、父の生活はたちまち不便になったそうです。

なぜなら、手術後すぐには歩くことができず、車いす生活をしなくてはならなくなったからです。父にとって人生初の車いす生活がスタートしました。コロナ感染対策の関係で僕は病院に行くことができなかったのも、父が退院してから車いす生活の様々な気付きを教えてもらいました。

父は、困った事もあったけれど、うれしかった事もあったと言っていました。まず、困った事は、病院内のコンビニに買い物に行った時のことです。病院内は車いすでの移動を考えたり作りになっているで、それまで通路をきゆうくつだなと感じたことはなかったのですが、コンビニ前の通路にたまたま業者の方が置いたダンボールがあつて通ることができないトラブルにあつたそうです。決して悪気があつてダンボールを置いたわけではないだろうけれど、もしかしたらだれかを困らせてしまうかもしれないと考える行動できたら良かったのと思いました。また、コンビニの中でも困ったことがあつたそうです。それは、パンを買おうとしたら商品が上の方にあつて、なにが置いてあるか見えなかつたそう

です。手にとって見たいと思つても手が届かずとても不便だったそうです。

一方、うれしい出来事もあつたそうです。商品が取れず困っていたコンビニで、知らない人から取りましようかとやさしく声をかけられたそうです。また、エレベーターで優先的にゆずってくれたり、とびらを押さえてくれたりして人のやさしさにとても感謝したと言っていました。

今回、父の実体験を聞いたことによって僕もたくさん気付きがありました。車いす体験の時、楽しいと感じていたけれど、それは僕が不自由のない生活ができているからこそ感じたのだということですね。これからは、視野を広く持つて困った人がいたら、まっ先に声をかけてあげられる人になりたいなと思います。また、五体満足に生まれて健康だからこそ常に目標を持ってあきらめることなく何事も頑張っていきたいと思えます。

# 病氣と戦っている人のために

御崎小学校五年 小林 柑奈

私には、おじいちゃんとおばあちゃんが一人しかいません。おじいちゃん二人は、私が産まれる前と、二才のときになくなったのであまり記おくにありません。おばあちゃんは五才の時になくなりました。保育所のおむかえやお出かけをたくさんしたおばあちゃんなので、その時の話をお母さんに聞きました。

私のおばあちゃんは、やさしくて、料理が上手でした。特に具のたくさん入ったおでんは、家族みんな好きでした。うるさくてあまりねなかつた弟には、口ぐせのように「も〜〇〇（弟の名前）、早くねて〜」と、おもしろく言うおばあちゃんでした。そんなおばあちゃんを私は大好きでした。

でも、おばあちゃんは、病氣になってしまいました。病名は「原発不明がん」。原発不明がんとは、転移からみつかるとは、その原因となるぞう器が不明のがんのことです。おそらく、このぞう器が原

発かなというところの手術をしました。お医者さんは、家族には、組織がボロボロすぎてほとんど手がつけられませんと言ったそうですが、おばあちゃんには、悪い所は全部取りましたよと、伝えたそうです。おばあちゃんが安心するために、お医者さんは考えて言ってくれたんだと思いました。お母さんは、ボロボロないでこれからどうしていいこうとなやんだそうです。でも、周りが明るく前向きにいいこうと決心もしたそうです。

それから、一カ月に一回一週間入院をしてこうがんだい治りようを始めました。ふく作用で、やせてしまったことと、毛がぬけてぼうしをかぶっていたことを覚えていきます。その時のおばあちゃんの姿を見て、私と弟はしばらくかたまっていたそうです。自分が苦しい思いをしてまで、治りようをするのは、いやだなと思っただけどおばあちゃんは、きつと苦しいけど治るならがんばろう！そう思っただけと思いません。食べることと旅行が大好きなおばあちゃんは、元気になったら、おいしい物をいっぱい食べて、楽しい場所に行くたくさん旅行に行きたいと目標をもって

いたそうなので、がんばろうと思えたと思います。

半年ほどは、順調に治りようも進み、おばあちゃんも家族も治るのではないかな？と思っていたそうです。ところが、ある夜お母さんは、いやな予感がして夜中に起きたそうです。おばあちゃんから電話があつて、おなかがいたいから病院に連れて行ってほしいと言われ、きゆう急で行ったそうです。「腸閉そく」になつてしまつて、そのまま入院したそうです。水と点てき、調子が良くなるとゼリーなどを食べていたけど、もどしてしまふこともあつてそれがこわくて、食ふことがへつてしまつたそうです。

「食べれなかつたら何も楽しくない。」

今まで、前向きにがんばっていたおばあちゃんの気持ちが一気に下がっていると分かつて、お母さんは何も言えなかつたそうです。それを聞いて私は、おばあちゃんも食ふのが好きなのに食べれなくてショックだと思いました。その二カ月後ぐらいにおばあちゃんはなくなりました。ようち園から帰ってきて、おばあちゃんに対面した私は、大号泣したそうです。あまり覚えていませんが、きつとさみしく

て、悲しくて、つらい気持ちでいっぱいになつていたのだと思います。おそう式の時にたくさんの人が来てくれていて、おばあちゃんは、人気者だったんだなと思ひました。私もおばあちゃんが大好きなんだなと思ひました。

この話を聞いて私は、以前かみが長い時にヘアドネーシヨンの話をお母さんから聞いたことを思い出しました。その時は、自分のかみが人に使われるのが気持ち悪いと言つてしまつたけど、今はやつてみたいと思ひました。おばあちゃんは、かみの毛が無くなつても明るくすごしていたけれども、外にはぼうしをかぶつて出ていたので、やはりはずかしさはあつたと思ひます。おばあちゃんのように、治りよを一生けん命がなつてゐる人たちが、私のかみを使つて外に出るのが楽しいなやいろんなかみがたが出来てうれしいなと思つてほしくて、ヘアドネーシヨンをしてみたいという気持ちになりました。

お医者さんになつたり、病気を治す薬を作つたりすることはなかなかむずかしいけれど、今自分が出る事で、たくさんの人を助け、笑顔ですごせるよ

うにすることがあると思うので、見つけていきたい  
と思います。

## 二〇二二年夏の甲子園

坂越小学校六年 清水 琉 至

ぼくの、夏の楽しみの一つが高校野球の甲子園を  
見ることです。今年はコロナでたくさんの高校の選  
手が出れないことがありました。その中の一つの  
チーム県立岐阜商業の試合を見ているときに、先発  
の人が耳に補ちよう器をつけているのを見ました。  
耳が聞こえないのに野球をして、ピッチャーをして  
いることにおどろきました。このピッチャーのこと  
を知りたくなりました。

このピッチャーの名前は、山口恵悟投手です。2  
歳半のころに、先天性難聴であることが判明しまし  
た。4歳年上の兄の影きょうで、小学2年生の時に  
野球を始め、中学では岐阜中濃ボーイズでエースと

して活躍しました。岐阜県のろう学校中学部から  
「甲子園に行きたい。」

という思いから、名門の県立岐阜商業の野球部に入  
部しました。

ぼくも少年野球をしています。耳が聞こえない野  
球は、例えば周りの指示が聞こえなかったり、コミュ  
ニケーションがとれなかったりして、思うようにプ  
レーができないだろうと思いました。ぼくだったら、  
と中であきらめているかもしれません。

その日の試合では、コロナで十人も主力メン  
バーが出られなくなったこともあって、山口恵悟投  
手はすぐく点を取られてしまっていたけど、三振も  
たくさん取り変化球もキレが良く、どうどうとした  
ピッチングでした。とてもいいピッチャーだと思  
いました。試合中は、ピッチャーの時も周りがジェス  
チャーをして話したり、交代してマウンドをおりた  
後、監督が話をするときもマスクをはずしてジェス  
チャーで話していました。周りの助けや、協力があっ  
てここまであきらめずにこれたんだと思いました。

耳が聞こえないだけじゃなくて、ほかにもたくさ

んの障がいがあります。足が不自由な人、目が見えない人、このような人にぼくが出会ったら、「何かお手伝いしましょうか。」と声をかけ、困っていたら手伝えるような人になりたいです。

## 大切な命

高雄小学校六年 山下華依

今年、二人のひいおばあちゃんが亡くなりました。家のひいおばあちゃんは、姉弟げんかをしてたら「どないしたんや」と話を聞いてくれたり、外で遊んでると「アイス食べるか」などいつも気にかけてくれる大好きなひいおばあちゃんです。

でも徐々に身動きが取りづらく生活がしくくなくなったので老人ホームの施設に入っていました。

世間がコロナでさわがれ、施設も面会が出来なくなつてひいおばあちゃんに会えなくなりました。家

族に会えないからか元気がなくなり、徐々にご飯が食べられなくなってしまいました。そして病院に入院することになり、点滴などをして少しだけまたご飯が食べられるようになりました。病院では、お父さんやお母さんは面会が出来て、私はテレビ電話で話をすることが出来ました。久しぶりにひいおばあちゃんの姿が見れて話が出来てとてもうれしかったです。だからまた家に帰って来ていっしょに話せると思っていました。

でもまたご飯が食べられなくなってしまいました。病院ではもう何も出来ないみたいで施設にもどることになりました。もどる前にひいおばあちゃんとお話出来るタイミングがありました。バレーをしている話をして、大好きなニコニコ笑顔で「頑張ろうか」「頑張りよ」と言ってくれました。

半月後の一月二十五日に私がコロナのうこう接しよく者で自宅待機している時にひいおばあちゃんは亡くなつてしまいました。最後のにおそう式に行くことも出来ませんでした。コロナがなければちがう未来だったかもしれないと思うととても悲しい

です。

もう一人のひいおばあちゃんは、六月のことです。学校から帰ってきてから亡くなったと聞いて急だったからおどろきました。朝いつも通り家族と話をしたりして、自分の部屋で昼寝をしているのを起こしに行ったら、息をしていなくて急いで救急車を呼んだけど亡くなったそうです。

よく話をしてくれるひいおばあちゃん色々な話をしました。私が見たことないひいおじいちゃんの話などをたくさんしました。花見やゴールデンウィークには一緒にバーベキューをしたり家に遊びに行ったら必ず「またいつでもおいでな」と言ってくれました。

ケガや病気もなかったのに突然こんなことになるとは思わなくて心の準備も出来ませんでした。

この半年間の出来事でいつだれがどこで何が起るか分からないと知りました。私にはまだおじいちゃんやおばあちゃんと呼べる人がいます。その人達をこれからも大切にしていきたいと思います。

## 私にとっての福祉

有年小学校五年 高本 紗彩

福祉作文が出たとき、私はそもそも「福祉とは？」と思いました。作文を書く前に福祉とは何かを調べました。

すると「幸せ」を意味する言葉だそうです。人間が幸せになるために活動することを福祉活動と言います。おとしよりであったり、体の不自由な方であったり、小さな子どもなどのだれかの助けがないと生きていけないならかのじじょうをかかえた人を助けるのが福祉です。

それを知って私が作文に書こうと思ったのは、五才と〇才の弟の事についてです。二人とも小さいのでまだ、自分で自分の事がうまくできません。

五才の弟は、とても体は元気がかっぱつですが、他の子よりも少し人と会話するのが苦手なので、今より上手に人と話せるように特別な教室に通っています。自分の事も、少しずつ上手になんでもできる

ようになってきましたが、お母さんが手伝ってあげないといけない事もまだまだあります。私の弟はかわいいです。なので困っていたら手伝ってあげたり、おしえてあげたりして、弟ができた!!と思えるようにしてあげています。

見た目だけでは、他の人に不自由な事があるか分からない事があるんだなあと弟を見て思うことがあります。

お母さんにその事を話すと、まだあまりおなかがめだたないにんぷさんや、目が見えづらい人、耳が聞こえにくい人、見た目だけでは困っている事が分かりにくい人もいるんだよと教えてくれました。

自分が困っている時に言いづらくても、友達が気付けてくれて声をかけてくれたりするととてもうれしいです。なので、困っている人がいるときは、勇気を出して行動に移せたらと思います。

もう一人の〇才の弟は自分では、まだ何もできません。

話す事もできないのでお母さんやお父さんがいるんな事に気付いてお世話をします。この前も少し目

をはなした時に、小さなゴミを食べてしまい、大変でした。家の中でもあぶない事がたくさんあります。なので、家族みんなでだれかがずっと見守ってあげる事が必要です。

小さな弟がいると大変な事も多いです。

が、家族だけでも色々な事が大人数で楽しめてとても毎日楽しいです。

私にとっての福祉は、小さな事かもしれませんが、家族みんなが仲良く、楽しく生活できる事だと思います。

## ぼくの弟

原小学校三年 武内 永和

ぼくには、弟が二人います。そのうち、三さいの弟には、しょうがいがあります。自閉症スペクトラムというしょうがいです。みためはふつうの人とかわらないけど、言葉をおぼえるのが苦手だっ

たり集だん行動が苦手だったり人とかかわることが苦手です。

弟は、もうすぐ四さいになるけど中身は二さいの赤ちゃんみたいです。お父さんとお母さんは、弟がほかの子より成長がおそくて、しょうがいがあると、びょういんの先生に言われた時ショックだったみたいです。

弟は、家で一番あまやかされて、ぼくがしたらおこられるようなことをしてもおこられなくて、いつもだれからもかわいがられてずるいと思うこともあります。

でも、お母さんは、今はかわいいですむけどしょう来が不安だと言っています。

弟は、今、ほいく園にかよっています。三さいじクラスですが、クラスのお友だちと同じようにあそんだりおゆうぎをすることが苦手です。でも、先生やクラスの友だちがやさしくしてくれるので毎日いやがらずに行っています。そして弟は週に二回言葉をおぼえるリハビリにもかよっているので、さいきんはよく話をするようになりました。

まだ、上手に会話をすることは、むずかしいけど、いつかいろんな話を弟としたいです。

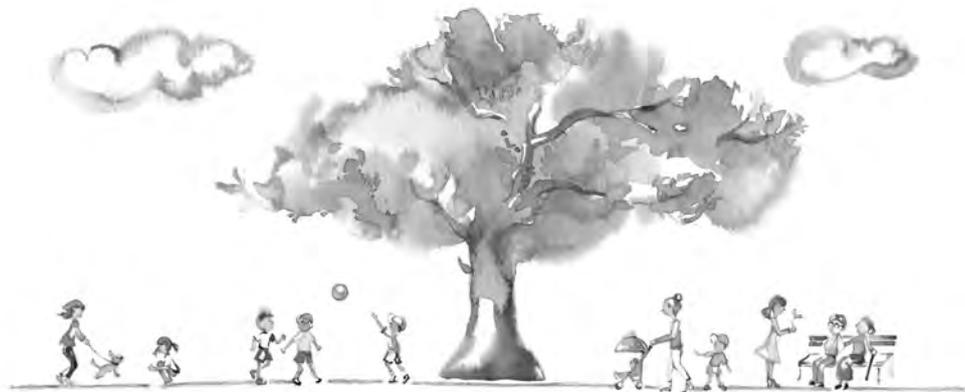
弟は、集だん行動や人とかかわる事が苦手ですが、なれた人にはニコニコしてよっていたりもします。かんきょうが変わる事も苦手みたいです。たとえば、ぼくは四月になって新しい学年になって新しい教室へ行くのはワクワクするけど、弟はそれがストレスになるみたいです。自閉症の人は、毎日、朝おきてからねるまでの一日が時間わりのように決まっている人が多いです。だからかんきょうの変化が苦手なんだなと思いました。

弟は、きょう味の無い事はまったくおぼえないけど、すきな事にはものすごく集中します。弟は魚がすきで、毎日、魚の図かんを何冊も読んでいます。テレビでユーチューブを見てもほとんどが魚です。はつきりと発音ができていないけど、弟はものすごくたくさんの魚のしゅるいを知っています。それも自閉症の人の特性というのみたいです。

この世界には、しょうがいがある人がたくさんいます。ぼくはしょうがいもびょう気もなく元気だから

ら、しょうがいがある人の気持ちはよく分からないけど、自閉症の弟がいるのでしょうがいを身近に感じる事ができます。弟のように見た目でしょうがいが分からない人は周りから理かいされにくくて生きにくいんだとお母さんから聞きました。そういう人たちのためにヘルプマークという赤いマークがあるようです。ヘルプマークをつけている人は何かえん助がひつ要な人です。ぼくも見かけたら、せつきよ  
く的に声をかけて助けてあげようと思います。

ぼくの弟は、しょうがいがあるけど、とってもかわいいです。これから弟のことでお父さんお母さんがこまっていたら、ぼくが助けてあげたいです。





## 中学生の部 特選

二つ目は、助け合いを大切にし、思いやりの気持ちを持つことです。これは、体の不自由な人だけへのことではなく、いつも心がけておけることかもしれません。

中学校へ入ってHAPという野外活動に行きました。そこでは、少し難しいプログラムに班のみんなと挑戦しました。手で支えたり声かけをしたりして、助け合いながら課題をクリアしていききました。一人では難しいことも助け合えばできるのだということがわかりました。助け合うには、相手のことをよく考えて行動するということもわかりました。

これまで、ぼくは助けてもらおうという経験をたくさんしてきました。右手を骨折したときも、長い間学校を休んだ時も、まわりに助けってもらってありがたいという気持ちでいっぱいになりました。

今度は、ぼくがだれかの助けになればいいなと思います。その時は、新聞記事の高校生のように、積極的に動ける人になりたいです。

声かけ一つでもバリアフリーをつくり出せるということを心に留めておきたいと思います。

## SOSのサイン

赤穂西中学校三年 井出 乃愛

「えっ?」

母と出かけた夏の日、信号待ちをしていると目線の先に見たことのない長い白い棒を真つすぐに立てて持っている方がいました。

この方が持っていたものは「白杖」というつえなのですが、皆さんは「白杖」って知っていますか。「はくじょう」と読みます。

私は、この日初めて「白杖」を目にして、何を意味しているのか分からず思わず声が出てしまいました。すぐ近くにいた人が話しかけていて、私は母にその意味を聞きました。男性は目が不自由であること、困っていることが起きていることが分かりました。

道路交通法に「目が見えない者（目が見えない者

に準ずる者を含む）は、道路を通行するときには、政令で定めるつえを携え、又は政令で定める盲導犬を連れていなければならぬ」とありますが、このつえが「白杖」です。視覚障がいのある方だけでなく、肢体不自由、聴覚障がい、平衡機能障がいのある方も使用することができます。長さは一般的なものでもメートルから一・四メートルくらいあります。周囲の情報を入手する、身の安全を確保する、そして視覚障がい者であることを知らせるといふ大きな役割があります。また、使用者はどんな時も使わないといけない訳ではなく、時間帯や天気によって見え方が違う方がいるので携えてなくてはいけないけど使わない時もあるということ。使い方もいくつあつて、白杖の石突を路面に滑らせる方法のスライドテクニック、進行方向の左右を白杖で叩きながら歩行する方法のタッチテクニック。これは、反響音を聞くことで物があるかないかを知らせることもできます。歩行環境に合わせて方向も変えられています。

あの時、男性は目の前にあつた赤い三角コーンが何か分からず困っていました。風で倒れたのか、三

角コーンだと分かりにくかつたのも原因かもしれない。声をかけられていた方が、さっと立てなおし会話されて何事もなく歩かれて通りすぎていかれました。

男性がされていたポーズは、「白杖 SOS」と言い、困ったことが起きたり、手伝いが必要な時に表現するものだそうです。お声かけされていた方はすぐ分かつたと思うのですが、さりげなくて私は眺めていただけでしたが、対応がとても素敵でした。

身近な SOS があふれていると思うのですが、言葉にしなくても一つの合図で通じるサインがものすごく大きなものを感じて感激した記憶があります。知識がないとできないことで、突然の対応をそうしたいと思つても行動を起こすことができない人も多いのではないのでしょうか。私自身、気がついていてもどうしようと動揺するだけで動けないことが多いです。ですが、「SOS」を出すことがもつとどうしようと困つた上での行動だとしたら……。せっかく貴重な体験で得た知識なので、サインに答えられるようになるうと思いました。

バリアフリーや介助も必要で障がい者が過ごしやすい環境を整えることは大切です。ですが、もっと大切なことは障がいある・なしに関係なく互いに寄り添える社会だと思います。

人権という言葉と概念を前にするといつも立ち止まってしまう自分があります。答えようと思っても言葉に詰まってしまいます。大きすぎる課題と複雑な感情がたくさんあるので、何をどこからどうすればいいのかわかりません。体験してみないと分からないのも当然のことですが、人権の痛みは思っても理解できるとは言えないのではと切なくなります。それでも、人は色々な課題を丁寧に考えるべきだと思っています。でない、大切な問題が埋もれてしまうからです。私達子供も思いを一つ一つ声に上げ、社会に伝えて受け取ってもらいたいのです。それが、共に心地よく生きるという理想に近づく一歩ではないかと思うのです。

## 中学生の部 入選

### 見方が変われば心も変わる

坂越中学校一年 中嶋 望 愛

私には、生まれつき重度の障がいを持った十歳上のいとこのお兄ちゃんがあります。

赤ちゃんのころミルクをなかなか飲まなかったり、何でも成長がおくれていたりして色々な病院で検査をして、生まれつき障がいがあることが分かったそうです。どの病院でも病名は分からず、数十万人に一人位の難病だそうです。小さいころは足が立たなくて歩くことも出来なかつたけど、少しずつ手を持って歩けるようになりました。初めて足が出た時は、すごくみんな喜んでいたと聞きました。話せないから、今何を考えているのか気持ちを理解するのは人より難しいし、トイレで出来ないのがオムツを交かんしたりと大変だけど、可愛くて仕方ないと

いとこのお母さんが言っていました。いとこのお兄ちゃん甘い物が好きで、洋がしを食べた時にっこり笑うし、もつと食べたいと手を出したり、『ア〜ア〜ウ〜ウ〜』と、しゃべって表現していました。気に入らないことがあるとおこります。いとこのお兄ちゃんは二十歳を過ぎてから今も、重度の障がい者しせつで暮らしています。リハビリがあつたり色んな指導があつて成長するには良いけれど、いとこのお兄ちゃんのお母さんは、

「早く会いたい、早く連れて帰りたい。」

とよく言っています。コロナ禍なので面会も出来ず、オムツを届けに行った日には、窓の外からかくれるように見て帰っているそうです。私も会いたいです。障がい者というと、世間では偏見や差別があるけれど、私は物心ついた時からいとこのお兄ちゃんを見ていたので、障がいがあっても偏見を持つたりしません。個性がある同じ人間で幸せになるべき人間です。

私は障がい者の実話の本を読んだことがあります。その子は乳児重症ミオクロニーてんかんという

病気で発作がきわめて多く、息ができなくなり亡くなることもある大変な障がいです。多動や重い知的障がいもあります。単語もなかなか出ないので『かあさん』と言うまで十二年かかったそうです。その子の両親が言ったセリフが、私のいとこのお兄ちゃんのお母さんが思っているのと重なってとても心に残っています。『しゃべれないけど居るだけで人の心をなごやかにするまほうの力がある』『言葉がいっぱいなくても心でお話が出る。だから、生まれてきた意味がある』『その命のあるかぎり、精一杯生きるための応援をする』私は、そんな親の想いにとっても感動しました。病気になったのは誰が悪いわけでもないし、その障がいの特性は個性なのです。大切な一人の命、守られて当然で愛されて当然。そして、不自由なのに人一倍がんばっているのです。だから、障がいを持っている人に対して、冷たい視線や冷たい言葉をはくのは本当に間違っています。腹が立ちます。まだまだ偏見が多い世の中なので、早く見方が変わってほしいし、差別がなくなればいいなど強く願っています。

## 高齢者問題について

赤穂東中学校二年 日 木 茉奈佳

今、日本では高齢化が急速に進行しているそうです。私たちとは深く関わっていないと思っただけ、今高齢者の人が暮らしやすい生活を送っているかや、私たちが高齢者になったときのことを考えると、もっと高齢者問題について知りたくなりました。

私は、高齢者への虐待があることにおどろきました。親族などが暴力や暴言、介護を放棄するなどが問題となっているそうです。そんなことをされている高齢者の方は、絶対悲しい気持ちになると思います。高齢者にとって、家族と楽しく話をしたりするのは大切だと思いました。しかし、介護のストレスが原因で虐待をしてしまう親族もいることが分かりました。私も介護をする側だったら、少ししんどいなと思うかもしれないと思うと、一人で抱え込まずに誰かに相談することが大切だなと感じました。今では介護センターもあるので、介護する人

の負担を減らすことも大切になると思いました。

また、介護を受けたいけど受けられないという人もいることが分かりました。原因は、介護従事者が不足していることだそうです。高齢化で、高齢者の人が増えている中、施設に入れないと困ってしまう人がたくさんいると思います。施設に入れない人が増えると、虐待などが起こる原因になってしまいうんじゃないかと思いました。そのため、介護従事者の働く環境を見直したり、介護従事者の育成に力を入れることが大切だと分かりました。もっと多くの人を受け入れられて、高齢者の人が暮らしやすい環境になればいいと思います。

私のおばあちゃんが、毎週月曜日に体操をしに行っていて、昔一緒に行ったことがありました。その時印象に残っていたのは、おばあちゃんたちで楽しく話をしたりしていたことです。普段、あまり会うことのない人たちや、地域の人とも交流できている高年齢の方がいても、話したりすることで元気になったり相談できるのが良い所だと思うので、もっ

## 中学生の部 佳作

### 気付き、助け合う社会に

赤穂中学校三年 石原陸翔

と地域で交流する場所が増えてほしいと思います。私は、高齢者問題について調べて、初めて、地域包括ケアシステムというものがあることが分かりました。地域包括ケアシステムとは、要介護状態となっても住みなれた地域で自分らしい生活を最後まで続けられるように、地域内で助け合う体制のことだそうです。高齢者の人も、住みなれた環境の方が生活しやすいと思うし、地域の人たちで支え合うことでもっと地域が明るくなると思います。困った時に、より多く頼れる人がいた方が助かると思うので、とても良いと思いました。

私は、高齢者問題や高齢化はこれからも続いていく問題だけど、家族や地域で支え合っていくことが大切だと分かりました。今高齢者の方も、その周りにいる人も暮らしやすい生活が送れるように、地域包括ケアシステムなどがもっと広まればいいなと思いました。

僕には、八十才をこえた祖父母がいます。僕が生まれた時からいつも気にかけてくれ、とてもかわいがってくれている僕の大好きな二人です。

祖母は、脊柱管狭窄症の手術をしてから足にしびれが残り、感覚も少しまひしているのです、足元に気を付けなくては、こけてしまいます。

祖父は、七十才を過ぎても営業の仕事を続けて、退職するまで毎日外まわりで一萬歩以上歩いていくくらい丈夫な体です。でも、ここ最近はやはり祖母と同じ脊柱管狭窄症と診断され、手術こそしていませんが、足がしびれ、ひどい時には激痛で歩くことが出来ないそうです。祖父母は大阪に住んでいて、しかも二人だけで生活しているので

ても心配です。

祖父はとてもアクティブなタイプで、足が痛くても、僕たち家族と旅行に行くことをいつも目標にして毎日、病気やけがをしないよう頑張っているそうです。最近では、コロナが落ち着いていた春休みに淡路島へ一泊旅行を実現することができました。その時に僕が感じたのは、観光地やサービスエリア、ホテルなどまだまだ段差が多かったり、古い建物になるとエスカレーターやエレベーターが必ずしも完備されている所ばかりではないということです。もちろん昔よりはバリアフリーになってきてはいますが、実際に祖父母のように杖をついている人や、車椅子利用の方には厳しいだろうなと思える箇所がありました。今、僕たちは若いから、道に少々段差があっても観光地に階段しかなくても、何も不自由に思うことはそれほどありませんが、年を取り足がおぼつかなくなるということは誰もが「いずれ行く道」なのです。もちろん足元だけでなく、目や耳、色々な所に不自由さを感じるようになる可能性が高いのです。だから僕たちのような将来を背負っていく若

者は困っている人に気付いた時には、自分の身内ではなくても、目となり耳となり手足となって、人生の大先輩を少しでも手助けできるように、様々なことを学ばなくてはいけないのです。

今の僕に出来ることと言えば、祖父母と一緒にいる時は移動する際に横で支えることや、荷物を持つ、耳が遠くなってきた祖母と話す時には、ゆっくりと大きな声で話しかける等、本当に当たり前のこととだけども、これから自分の気持ち次第で、高齢者の手助けをする手段を身につけることは可能だと思います。

僕たちが生きていくこの世の中で大切なことは、全ての人が支え合ってお互いを尊重し合うことです。生まれてから十五年間、たくさんの人に助けってもらい、かわいがって育ててもらってきた恩返しというのは少し違うかもしれませんが、自分の祖父母や両親だけでなく、地域の方々、特に高齢の方や何か困っている人には、やさしく声をかけ、何か手助けできることはないかと考えながら生活していきたいと思っています。まずは、まわりの人へのあいさ

つを大事にするべきだと思えます。祖父は常々「あ  
いさつをされて嫌な気分になる人や怒る人はいない  
よ。」と言います。その通りです。そこから会話も  
生まれ、つながりができることもあります。一人暮  
らしや、僕の祖父母のように、孫となかなか会えな  
くて寂しいおじいちゃんやおばあちゃんに元気を与  
えられるかも知れません。

小さなことでもまわりの人が困っていたら助け合  
える世の中になるよう、そしてそれに気付くことと  
ができるようアンテナを張って生活していきたいと  
思えます。

## ぼくのどきどき

赤穂西中学校一年 山 本 雅 士

ぼくは、小耳症という病気で、生まれつき右耳が  
ありません。右側の音がよく聞こえません。マスク  
を耳にかけたり、メガネを耳にかけたりすると、す

べり落ちてしまいます。だけどぼくはこの右耳が好  
きでした。耳たぶみたいなのところがちょっとあって、  
さわると気持ちよくて、福耳だといって、よく友達  
に自まんしていました。

でも、やっぱりみんなと違うし、メガネもズレる  
ので、手術をすることにしました。

学校を休んで入院するので、友達が「いつてらっ  
しゃい会」をしてくれました。先生もたくさん宿題  
をくれました。ぼくは、はりきって手術をしに行き  
ました。

手術は痛いしたいへんだったけど、同じ病気で同  
じ手術を受けている子がたくさんいて、すごく仲良  
くなれました。

今まで、同じ病気になった子にあったことがな  
かったけど、病院では同じ病気の子がたくさんいて、  
ぼくは、ぼくだけじゃないんだと思ってすこしホッ  
としました。

同じ病気の子といろいろ話していると、ぼくみた  
いに片方はきこえる子ばかりではなくて、両方の耳  
がきこえにくい子もいて、同じ病気でもいろいろ違

う所があるんだなあと思いました。

また、病気を秘密にして手術に来ている子もいました。ぼくは皆に耳のことを話していたので、話を聞いていたらなんだかつらい気持ちになりました。

でもぼくも耳がかくれるようなヘアースタイルにしていたから、秘密にしたい気持ちも分かりました。同じ思いを同じように感じられる友達ができて、とても楽しく入院できました。

ぼくは左側はよく聞こえるけど、右側からコソコソ話をされると聞こえにくいです。同じ病気の子で両方の耳が聞こえなくて、補聴器を使っている子もいました。改めて同じ病気でもいろいろ違うことが分かりました。そして、同じ病気の子の気持ち、ぼくはすごく分かりました。今までは皆とちがうと思っていたところが、同じ病気の子は同じように感じていたんだなと思えてうれしく感じたからです。

同じ病気で同じように感じるのがたくさんあって、ぼくは、同じように感じられることはとてもうれしかったので同じだと感じられることはとても大切で、幸せなんだなと思いました。

世の中には、いろんな病気の子がいると思います。

同じように、いろんな障がいのある人もたくさんいると思います。ぼくがメガネがずれて困った様に、いろんな病気でいろんな困ったことがあると思います。ぼくは、その人じゃないから、全ては分からないと思うけど、「みんなと違う」と思うさみしい気持ちや、「ぼくと同じだ」と思ううれしい気持ちはよく分かるので、そういうことをいろんな人達と共有していきたいなと思っています。

まずぼくは、自分から話しかけていくことを大切にしていきたいなと思いました。だけど、同時にそれは難しいことだとぼくは思います。秘密にしてほしい気持ちや何をきかれているのか分からなかったり、どう答えていいのか迷う気持ちもあるのだろうと思うからです。ぼくは同じ病気の人や同じクラスの人とは話しやすいけど、確かに突然知らない人話しかけられたらとてもびっくりしたりするので、何か障がいがある人には、同じような立場の人達となら話しやすいんじゃないのかなと思います。

ぼくは、将来なれるのであれば、ぼくを手術して

くれた先生の様に立派な医者になって、ぼくみたいな小耳症の人に話しかけて、話をきいて、はげましてあげて、「ホッ」とさせてあげたいと思っています。手術の前の不安な気持ちや、手術の後の管などのいやな感じも、今までよく動けたのに体が動かせられない安静の大変さも分かり合えると思うからです。

これからぼくはいろんな経験をしていくと思います。そのたびに、人と分かり合えることが増えると思います。そんな事をしっかりと心にとどめておいて、大人になった時に人の役に、そして社会の役に立てるような人になっていきたいと思っています。

## じまんのひいおばあちゃん

赤穂東中学校二年 内藤 真白

私には、今年100歳のとても元気なひいおばあちゃんがあります。

ひいおばあちゃんは、みんなに優しくして、元気な

ので近所の人や私たち親族にも好かれている素敵なおばあちゃんです。

そんな元気なひいおばあちゃんは、今上郡で一人で暮らしていて、つえもつかわずに歩いて、洗濯や料理などいろんなことを全て一人でこなしています。

ですが、3年前急にこしが痛くなり、動けなくなりました。家の中を車椅子で移動できるように段差をなくしたり、手すりを色んなところにつけて、ひいおばあちゃんが少しでも楽に暮らせるようにしてもらいました。

私はあの元気なひいおばあちゃんが寝たきりになってしまふのではないかと心配したけれど、会いに行く度元気になってくれてとても安心しました。

今は、ホームヘルパーさんに、週1回来てもらっていて、健康チェックとお話し相手をしてもらっているそうです。

私がひいおばあちゃんの家に行くと、「来てくれてありがとう。ましろちゃんの写真を見ると元気になる」と言ってくれます。

そんな優しいひいおばあちゃんが私は、大好き

です。

新型コロナウイルスは、まだ収まらなそうだし、部活の予定がいっぱいで、たまにしか会いに行くことができません。でもひいおばあちゃんに会うと、とても元気をもらえます。今年の6月に、ひいおばあちゃんが100歳になったので、100歳の祝いでみんなが集まることができました。あまり長くは居ることができなかったけど、久しぶりにみんなと会えてとてもうれしかったし、ひいおばあちゃんもとても喜んでくれたので、本当はうれしかったです。

私は昔からひいおばあちゃんが大好きで、よくおとまりをさせてもらっていました。その時は、いっぱいご飯をつくってくれていっしょに寝たりして、本当に楽しかったのを今でもしっかりと覚えています。今は、新型コロナウイルスがまだ流行っているからおとまりすることはできません。でも、いつかコロナウイルスがなくなっておとまりさせてもらうときは、私がおいしいご飯をつくってあげて、今までしてくれたことを倍にして恩返しをしてあげたいです。

ひいおばあちゃんは、私にとってあこがれの存在です。私も将来ひいおばあちゃんのように長生きをして、人をたくさん笑顔にしたいです。ですが、ひいおばあちゃんはもう100歳なのでいつどうなるかは分かりません。なので、ひいおばあちゃんとの時間を大切にして、何かあったら私が絶対に助けてあげたいです。ひいおばあちゃんだけでなく、学校などでも困っている人がいたら、すぐに助けてあげて、みんなが生活しやすい世の中になってほしいです。

## 誰でも平等に楽しむために考えを深める

坂越中学校一年 平 井 心 羽

「何このゲーム、おもしろい。」

これが初めてポッチャを体験した時に感じたことでした。ポッチャは、野球やバレーのように、走ったり飛んだりなどと、激しい動きがなく、誰でも気

軽に楽しめるスポーツです。現在は、障がいのある人でもスポーツを思う存分楽しめるパラリンピックも開催されています。これは、障がいのある人でも簡単に楽しめるので、続けていってほしいです。

私は、赤穂特別支援学校との交流会で体験したこのボッチャというスポーツを通して、誰でも平等に楽しむことの大切さを学びました。

みなさんは、誰でも平等に楽しむために必要なことについて、考えたことがありますか。私は、これを機会に考えてみました。誰でも平等に楽しむためには、思いやりの心が必要だと思います。一緒に楽しみたいという思い、そのためにどうすれば良いかを考える必要があると思ったからです。障がいがあるからといって、「これはあなたにはできない」と差別したまま終わるのは絶対にしてはいけなく、これは思いやりの心がない人です。そこで、「一緒にできないからこうしよう」と、ルールを工夫したりすることが大切です。

逆に、自分が障がい者の立場となって考えてみてください。障がいがあるだけで周りの人から差別さ

れるのは嫌で、とても不満があると思います。差別される側は毎日、不満を持って生活しているということですよ。

改めて考えてみると、障がいのある人だけでなく、差別すること自体をなくしていかないといけないなと思いました。そのためには、一人一人が誰にでも平等に、そして思いやりの心を持つことが大切だと思います。だから私も、思いやりの心を持って生活し、誰にでも平等に接したり楽しんだりしていきたいです。

思いやりの心を持つためには、自分がしっかり意識して変わっていく必要があります。何も意識せずに、「こんな人になりたい」という願望を叶えられる人は、ほとんどいないと思います。その上で意識し続けたりなどの努力をした人がこの願望を叶えられると考えます。これは、人柄や性格だけに限らず、勉強やスポーツでも同じです。「テストでいい点数を取りたい」、「こんな選手になりたい」その目標などを達成するためにできることが努力です。私も、勉強や部活で達成したいこと・しないと決けないこ

とがたくさんあります。両方を達成するためには努力するしかないのです、何事にもたくさん挑戦して、目標や壁を乗り越え、達成していききたいです。

思いやりの心とは、ただ単に人に優しくするということだけではないと思います。思いやりのある人は、誰かのために、みんなのためになどと、積極的に行動できる人のことを示すと考えます。本当は行動に移さないといけないと分かっているけど、移せなかったら相手に何も伝わりません。行動に移せないと何の意味もなくなってしまう、それはとてももつたないことです。行動に移すまでできてこそ、本当の思いやりだと思います。私も、心の中では分かっていたのに、行動に移せなかったことが日常生活の中で何回かありました。これからは、何をすべきか分かったなら、積極的に行動へと移していこうと思います。

この作文を通して深めた考えを忘れず、一日一日を平等に楽しく過ごしていきたいです。

## ひいおばあちゃんの笑顔

有年中学校三年 遠 藤 蒼 依

「あんた、誰かいな？」「智子か？」

この言葉は、私が小学校四年生の時におじいちゃんの家遊びに行った時のひいおばあちゃんの言葉です。そして、妹のことを指差して、「誰だい？この子は？」と言いたそうな表情でこっちを見てきます。

最初は、沢山遊んでくれる優しいひいおばあちゃんのことだから、お父さんのお姉ちゃんの名前を冗談で言っ、笑かそうとしてくれるのかなと思いましたが、でも、様子がおかしいです。何回「私は蒼依で、妹は朱音だよ。」と説明しても、その時は、「あそがかそうか」と分かってくれるような感じがするけれど、十分もしないうちにもう一回聞いてきます。そんなしつこいひいおばあちゃんのことからその日から嫌いになってしまいました。

後日、おじいちゃんの家遊びに行ったとき、ま

た「あんた誰かいな?」「智子か?」と同じ質問をしてきました。二、三回目までは、我慢して答えたけれど、その後はめんどくさいなと思い、無視をしてしまいました。

その日のおじいちゃんの家から帰る車の中でお母さんが、「ひいおばあちゃんは認知症という病気で、今まで覚えていた記憶や今までやってきたことを突然忘れてしまうんやで。蒼依に意地悪してるわけではないから優しくしてあげてよ。」と言ってきました。聞いてすぐはピンと来ず、そうなんやぐらいしか思いませんでした。だけど、その日の夜、布団で色々なことを考えました。「なんで、無視してしまったのだろうか。」「ひいおばあちゃんごめんなさい。」や「ひいおばあちゃん許してくれるかな。」だとか。ひいおばあちゃんが『認知症』ということを知ってから私は、お父さんやお母さんに、認知症について詳しく聞いてみたり、インターネットや本で認知症に関するニュースや、認知症の人とどう接すればいいかなど沢山調べました。その内容は、後ろから声をかけてはいけないや、目線をあわせて優しい口

調で話すなど簡単そうだけど、ひいおばあちゃんを無視してしまった私にはとても難しい内容でした。

でも、ひいおばあちゃんともう一度仲良くする第一歩だと思い、頑張ってみました。今では、最初にもそのことを実践してから五年が経ちます。五年経ってもまだまだ対応が下手だけど、「ご飯美味しいね!」や「元気?」と話しかけたら、とても微笑んでくれます。そんな、笑顔が素敵でひいおばあちゃんには、今年で百一歳です。百一歳になり、家に帰ると突然言い出したり、おばあちゃんのことを叩いてしまったり、ご飯をこぼしてしまうなど、症状は激しくなってしまうけれど、全部ひいおばあちゃんには悪くないって分かっているよ。そして、ひいおばあちゃんのこと前より何倍も好きだからね。小さい頃に遊んでもらった恩や、お菓子やジュース、お小づかいをくれた恩、散歩につれてってくれた恩などまだまだ返せていない恩が沢山あるから、もっと長生きして、沢山恩返しさせてね。

## 高校生以上の部 大賞

### 魔法のエール

赤穂高等学校一年 平尾 幸花

「頑張れよ」私の祖父はいつも、この魔法のエールを私に言います。私の祖父は四年前のお正月、脳出血で倒れ救急車で搬送されました。それ以来、半身麻痺により高次脳機能障害になり、体が不自由な車椅子生活になりました。現在介護施設で生活しています。コロナウイルスで面会する事が禁止されましたが、時々、十分間のリモート面会があります。祖父の姿を見る事ができる便利なシステムです。

四年前私は小学校五年生でした。毎日のように病院へ行き、祖父の身の回りのお世話をしました。とろみがついたお茶を飲ませたり、固くなった足をマッサージしました。そんなある日、祖父のリハビリテーションの見学に付き添いました。リハビリの

先生は祖父に寄り添い手を合わせ挨拶をし、ゆっくり優しく丁寧に、そして真剣に対応していました。話す事が不自由になった祖父に言葉を発する言語聴覚士によるリハビリでした。「あーいーうー。」と先生は大きく口を開けて祖父の頬に手を当てリハビリされていました。お孫さんの名前は？と先生が聞きました「あちか」と他の人が聞けば分かりませんが、私には「さちか」と聞き取る事ができます。先生は顔の表情いっぱい使って祖父のリハビリをしていました。不自由でも目を合わせ会話ができる事を願います。私は祖父を応援しました。私はその時、言語聴覚士になる事を心に決めました。家族や大切な人と会話ができて、一緒に食事ができるようなお手伝いが出る職業に、大変、感動と魅力を感じました。私の夢案内人となってくれた、その時の先生が大好きでした。あの頃から今でも私の夢は変わりません。先日、言語聴覚士を目指す大学のオープンキャンパスへ行きました。言語聴覚士は専門用語でSTと言います。講師の先生、在学中の生徒の方からのアドバイスを受け、益々STを目指す事を心に誓いました。

## 高校生以上の部 特選

現在STは人材不足だそうです。とても必要とされる職業だと教えてくれました。コロナの影響で祖父と触れ合う事が難しく、リモート面会ばかりで寂しいです。面会の時、必ず祖父は私に「頑張れよ」と言います。私より不自由な体なのに、その魔法のメールは幼い頃と変わりません。私はそのメールをいつまでも言い続けてくれるまでSTを目指し、世の中の沢山の人が笑顔で会話して過ごせるように頑張りたいです。

現在AIの普及に伴いセルフサービスなどで人と人との間に壁ができています。私は介護する側、される側は人の温かい触れ合いが大切だと思います。AIとリハビリができたところには心の温かさなんてないと思います。私の考える介護とは人と人だと思いません。障がいのある方もその家族、大切な人、身近な人が安心して心のぬくもりがある手助けができる人に私はなりたいと思います。おじいちゃん頑張るよ。ありがとう。

## 介護食配達ボランティアなどを通して

一般 真 鍋 憲 昭

「こんにちは、お弁当です。」月曜日と木曜日に介護特別食の配達ボランティアを昨年末から始めました。お陰で、在宅介護の方々とも顔なじみになりました。また、同じ配達ボランティアの地元の人達とも知り合いました。

私は2019年4月に四国の徳島から赤穂に転居して来ました。私は40年間の公立学校教員を退職後、海外教育ボランティアとして十年余りネパール、タイ、カンボジア、ベトナムで教員をしてきました。現在は赤穂で外国人の日本語指導、児童生徒への学習支援をしています。

私は昨年の秋に開催された「運転ボランティア講習会」に参加しました。その時、初めて介護食

配達ボランティアがあることを知りました。赤穂市内の地理はよく知りませんが、物は試しと思っ  
て参加させてもらいました。概ね2人で配達する  
ことや時間的にも無理がないようなので、安心し  
て加入しました。

当初は戸惑う事もありました。それは、配達する  
お宅は、私が通った事のない道です。次に地名も馴  
染みのない所です。大津、木津、坂越、御崎、尾崎、  
千鳥等、初めて聞く地名でした。苗字も馬場<sup>ばば</sup>と書いて  
ウマバと読む。土地勘がないのは苦しいものでし  
た。配達の仲間が話している会話の中に地名や人名  
の固有名詞が出て来ると理解できませんでした。更  
に、私には大きな障がいがあります。それは加齢性  
難聴です。補聴器を着けていますが、コロナの為に  
皆さんマスクをしています。口元が見えません、そ  
して、マスクのせいで声がこもって聴き取りにくい  
のです。

しかしながら、介護食の配達をしていて良い事  
がたくさんあります。一番は、どの家庭でも喜ん  
で迎えてくれます。このお弁当は調理ボランティ

アの方々が作ってくれているのに、「ありがとう」  
の感謝の言葉は私達が受けます。調理の方に少し  
済まない気持ちを持ちながら、「どういたしまして」  
と返事します。そこで思ったのは、調理の方々の  
苦労や工夫の様子を介護家庭に届けると良いと思  
いました。

次に良いことは、赤穂の細かい地理がよく分かっ  
た事です。少ない日でも4軒、多い日には10軒訪問  
します。普段は通らない所へも行きます。この配達  
のお陰で、赤穂の路地裏の道まで覚ええました。

更に、配達の仲間との交流の輪（和）が生まれま  
した。赤穂の昔の様子を教えてくださいました。また、  
美味しい名産品や料理店も紹介してくれました。転  
入者にとっては本当に有り難い情報です。

最後に、心のこもった美味しい介護食をいただ  
いています。具材を細かく切った減塩の健康食です。  
栄養のバランスも良く考えられています。我が家で  
も参考にしていきますが、毎回のレシピと写真をSN  
Sにアップしています。それを見て国内や海外の友  
人が調理していると聞いたことがあります。

この配達ボランティアで得た知識や経験を他の活動でも役立てたいと思っています。

コロナの終息後は、ネパールやベトナムでの日本語指導に復帰するつもりですが、海外でもこの福祉ボランティアのノウハウを伝え広めて行きたいと考えています。でも、現時点では介護食の配達ボランティアを継続し、少しでも赤穂市の介護家庭のお役に立ちたいと強く思っています。どうか宜しくお願致します。



## 高校生以上の部 入選

### 一人一人の福祉

赤穂高等学校一年 寺田 想来

僕には五年ほど前、百歳で亡くなったひいおばあちゃんがいました。おばあちゃんは何十年もの間、一軒家に一人で暮らしていましたが、僕が三才の時に、僕たち家族が、おばあちゃんの家の傍に引っ越ししてきました。

その頃おばあちゃんは既に九十代でしたが、庭の草抜きをしたり、散歩に出かけたりと元気で、日常生活も一人で行うことができていました。引っ越してから二年後には僕に妹も生まれ、おばあちゃんはとても喜んでいました。

しかし元気だったおばあちゃんも、年々体が思うように動かなくなり、気がつけば、家から出ることも無くなっていきました。室内での移動には手押し

車を使いましたが、古い造りの家は段差が多く、僕と妹は日常的にそれを乗り越えるための手伝いをしていたことを覚えています。

ホームヘルパーの方々が訪問してくれるようになったのは、その頃でした。僕たち家族も、できる限りおばあちゃんの日常生活をサポートしていましたが、やはり、ベッドで寝たきりの生活になりつつある人の身体のケアは、専門の方の手助けが必要です。もし、この制度が無ければ僕たち家族は、自分たち自身の生活が苦しくなっていたかもしれせん。おばあちゃんは大切ですが、家族である僕たちが疲れきってしまったては、お互いに幸せな暮らしとは言い難いでしょう。ヘルパーさんはお風呂やトイレ、身体のケアなどを手厚く行ってくれ、僕たち家族はとても安心を得ることができました。

ヘルパーの方々と僕たちの間には、ケアマネジャーという職種の方も関わってくれていました。ケアマネジャーさんは、毎日の介護計画を立ててくれる方です。介護を必要とする家族の希望に沿うよう、相談に乗ってくれます。例えば、介護用ベッド

やポータブルトイレ等のレンタルの手配、必要な場所への手すりやステップの設置、訪問美容師さんの紹介など、様々な紹介や提案を行ってくれます。

ケアマネジャーさんは福祉施設から訪問してくれており、そちらの施設ではデイサービスを受けることもできます。デイサービスでは施設のお風呂に入れたり、食事やレクリエーションなどもできます。しかし僕のおばあちゃんの場合は施設に行くことに前向きではなかったため、家でできる限りのケアをしていたいただきました。そのように、一人一人のニーズに応えたサービスを行ってくれました。

おばあちゃんがほぼ完全に寝たきりとなる頃には、病院から医師と看護師も訪問してくれるようになります。おばあちゃんが食事があまり摂れなくなってきた頃からは、家で点滴等処置を行いました。おばあちゃんは、入院が必要と思われる時期にあっても、自宅で過ごしたいという希望があったので、最期までその希望を叶えられるように、たくさんの方々に協力をいただきました。

このように、一人一人に合った福祉の制度を利用

できることは、本人にとってもその家族にとっても何より安心であると言えます。

## 福祉から学ぶ幸せとは

赤穂高等学校二年 長谷川

楓

福祉とは、「幸せ」を意味する言葉です。私達は、福祉イコール高齢者と結びつけてしまう人が多いと思います。しかし、そういう訳ではありません。高齢者だけではなく、身体的に不自由な人であったり、小さな子どもだったり、誰かの助けがないと生きていけない事情を抱えている人を救済することです。そして、一人一人が「幸せ」になる為に活動することは、福祉活動・社会福祉援助です。困っている人を「幸せ」にするのであるならば、それは立派な福祉活動なのです。

ところで、世の中にはどのような福祉活動があるのでしょうか。高齢者分野では、老人ホームや訪問

看護サービス等が多くあります。老人ホームでは、食事や入浴・排せつ等の介護、日常生活上必要な援助を行います。また、訪問看護サービスでは、看護師が治療に必要な介護者の家を訪問し、世話または治療を行います。

児童分野では、保育所や児童養護施設等があります。保育所では、乳児や幼児を預かり保護者に代わって保育をします。また、児童養護施設では、保護者のいない児童、虐待されている児童が入所する施設で、養護するとともに、その自立支援します。

障がい児・者分野では、自立訓練や居宅介護（ホームヘルプ）等があります。自立訓練では、自立した日常生活、社会生活ができるよう、一定期間、必要な訓練を行います。また、居宅介護では、自宅で、入浴、排せつ、食事の介護を行います。

このように、まだまだたくさん福祉施設や福祉サービスがあります。私は知らないことが多かったのですが、もっと向き合っていきたいと思いました。

知らないこととは反対に、私達が普段生活している中でよく見かける福祉もあります。それは、視覚

障がい者の人をサポートする点字ブロック。視覚障がいだけではなく、聴覚障がい者の人をサポートするメロディ信号機。車いすの介助などで役立つだけでなく、多くの人が便利に使うことができるスロープ。これらの工夫で生活できている人もいます。

私は、小学校の時に、アイマスクをして点字ブロックの体験をし、中学校の時には車いす体験をしました。アイマスクをしていると、前が見えないので、どこに何があるのか分からないので、すごく怖いし不安な気持ちが大きかったです。車いすは、階段や段差、坂があるからやっぱり怖さはありました。操作をする側は、なるべく不安にさせないように、衝撃を与えないようにするのも難しかったです。このように私達は、体験を通して知っていくことがとても大切だと思います。

私達にできることはあります。ボランティア活動に参加すること。困っている人がいたら、声をかけて助けること。募金をすること。お年寄りや体の不自由な方に席をゆずる等、一人一人できることは違うけど、行動することはとても大切だと思います。

世の中には、いろいろな人が暮らしています。みんなが幸せに、ゆたかに暮らせるように国がいろいろな仕組みを整えています。国だけにまかせるのではなく、一人一人が助け合うことで、もっともっと幸せになっていけると 생각합니다。



## 運転免許証の自主返納

赤穂高等学校二年 中 元 俊 太

僕には、運転免許証の自主返納をした祖父母がいます。免許返納については家族全員で相談して決めました。祖父母は納得してくれて、すぐに手続きをしてくれました。

免許返納をすることになったきっかけがいくつもありました。一つ目は、他人の車にぶつけてしまったことです。八十歳も超えて目が見えにくくなっていったそうです。大きな事故にならなくて良かったです。二つ目は、駐車に十分以上かかってしまうことです。車で僕の野球の試合を見に来た時に、車とめられなくなったそうです。たまたま母が見つけて助かったようですが、もし一人の時ならと考えたら怖いです。

このような二つの出来事があり、免許返納しました。高齢者のアクセルとブレーキの踏み間違えや、周りが見えてないなどで、人を殺してしまう事故をよくニュースでみます。自分の祖父母がそうやってしまっていたらと考えるとはやめに行動していい良かったと思います。自分の親が年をとって運転が危ないと感じた時には、はやめに免許返納をさせたいと思います。

運転免許の返納に対してのメリットとデメリットがあると思います。まずはメリットを紹介します。一つ目は、交通事故のリスクが減ることです。一番大切なのは命です。それを守ることができるということはとても大きなメリットだと思います。二つ目は、サービスが受けられることです。タクシーやバスの割引券や鉄道のフリーパスなどがもらえるそうです。免許返納をして不安になることは、移動が難しくなるということですが、そういう時にこういうサービスがあると安心できるでしょう。

次はデメリットについてです。一つ目は、自信喪失につながるということです。運転に自信があった人に免

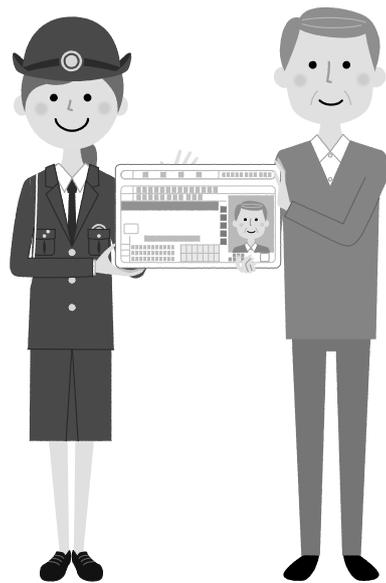
許返納を言うと辛いでしょう。なので、周りの人が上手に納得させる必要があります。二つ目は、手続きがあるところですが、免許返納の手続きは大変そうっていうイメージがあるのではないのでしょうか。しかし、そんなに難しいことではないのです。警察署に行つて、書類を書くだけなのです。こんなに簡単だということを若い世代が伝えていくべきです。そしてサポートしていく必要があるのです。

今の若い世代ができることは、免許返納した後のサポートをもっと充実させることです。

私の祖父は免許を返納してからは、移動に困っています。そういう人のためにも、今ある割引だけでなく、全額負担してもらうなどの制度はあってもいいと思います。その制度を追加することで命を救えるのなら安いものだと思えます。高齢者が事故を起こさないようになることで、事故を起こして払わなければならない金もなくなります。

僕は、もっと免許返納についてみんなに理解をしてほしいです。若い人は高齢者のサポート、そして高齢者ははやめの判断をする。国としては、生活が

困らないように支援をしていく必要があります。





この冊子は、共同募金の配分金で  
製本いたしました。

ご意見、ご感想等ございましたら下記までご連絡下さい。

〒678-0232 赤穂市中広267

赤穂市社会福祉協議会(総合福祉会館内)

TEL(0791)42-1397/FAX(0791)45-2444

E-mail ako-shakyo@ako-shakyo.jp

---

## 福 祉 作 文

令和4年12月発行

編集・発行：社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

---

